

木曽川



木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
秋号は木曽川左岸にひらけた尾西市から、
その歴史や日光川改修についてお届けします。
歴史ドキュメントでは「輪中と農業」を
シリーズで特集します。



尾西市

ふるさとの街・探訪記

木曽川とともに歴史を重ねた 尾西市

エリア・リポート

日光川改修の歴史の変遷

気まぐれにJOURNEY

尾西市の輝く女性たち

歴史ドキュメント

農業の進展とその課題

TALK&TALK

輪中の農業

民話の小箱

与三の火

国土交通省中部地方整備局
木曽川下流河川事務所

ふるさと探訪記

尾西市

尾西市のあらまし

木曾川・長良川・揖斐川の三川は濃尾平野の形成に大きな役割を果たしたが、尾西市は木曾川が流出する土砂堆積で形成された土地です。愛知県北西端、木曾川中流左岸の濃尾平野の中心地にあたり、西は木曾川をほとんで岐阜県羽島市、北東は二宮市、南は稲沢市・



中島郡祖父江町と接しています。尾西市は高い所で7m、低い所で4m。高地は河川の氾濫の際できた自然堤防の跡とみられ、ほとんどが平坦地です。江戸期以前は、木曾八流といわれる流れが蛇行し、氾濫による集落の興廃がはなはだしかった地域です。市の中ほどを北から南にかけて日光川が流下しています。江戸中期から農間全業としての綿織物や絹綿交織物の生産が盛んになり、尾張縞として全国市場に進出、以後国内最大級の毛織物産地として知られるようになりました。市名は、古くからの地方一帯を示す言葉でもあった尾西(尾張西部)から取られました。

木曾川とともに歴史を重ねた尾西市

木曾川水没遺跡

昭和四二年(一九六〇)一月から二月にかけて、木曾川の異常洪水により川底の一部が露出し、水没した遺跡の存在が確認されました。弥生後期に属する土器が発見されたほか、土師器・須恵器も数多く採集されました。この木曾川水没遺跡のほか、市内の微高地から弥生時代から中世の土器が発掘されており、早い時期から集落があったと推定されます。

荒野の開発と鍛冶・製鉄

古代律令下の尾西市域は尾張国中島郡に属していたようである。その後、伊勢神宮領として、御母板倉御厨^{おもいたくらごく}、笑生御厨^{わうごく}、加野御厨^{かのごく}などが置かれました。

承久の乱(一二二二)に京方についたため、一時所領を没収されたこともあった中島氏一族によつて、鎌倉時代この辺り一円は支配されていました。元応二年(二三三〇)の文獻によれば、鎌倉幕府御家人であった中島正介^{しょうけい}入道承念の所領には、「阿古江」(現尾西市明地の阿古井地区)、「曾不江」(現尾西市上祖父江・中島郡祖父江町祖父江)、「興郷」(現尾西市起)などがあり、ことに阿古江は中島

尾西市は、木曾川中流左岸の濃尾平野の中心地にあり、古くから河川の氾濫で村の興廃がはなはだしかった地域です。近世から治水事業は盛んに行われました。また、美濃路の起宿を擁する流通拠点としても成長。現在では日本最大級の毛織物生産地として発展を遂げています。

氏の有力な所領でした。

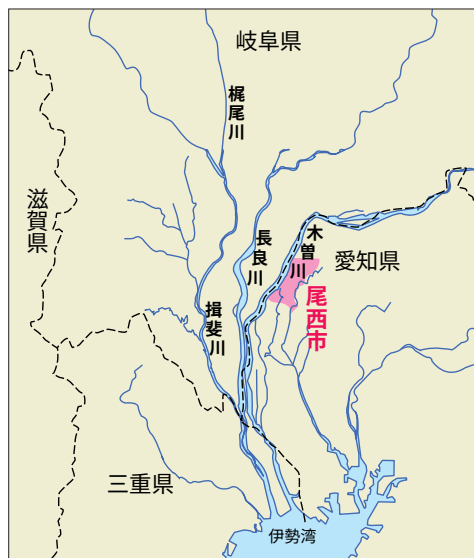
中世の尾西地域は古木曾川の分流が乱流していたため、「荒野」であった地域が多く見られます。この「荒野」とは未開の荒野ではなく、荒廃した既耕地や開発予定地のことで、開発・再開発の対象とされていたようです。

中でも阿古江は幾度となく開発、荒廃、再開を繰り返したところ。慶長一四年(一六〇九)、幕府重臣の伊奈備前守忠次^{いなのむねつぐ}の許可により新田が開発されたとしています。

このように新田開発には長い年月を要しており、中世の尾張・美濃では、荘園領主に納入する年貢は米よりもむしろ、絹・糸(生糸・綿(真綿)が大部分を占めていました。このことから木曾川氾濫原であった尾西地域は、早くから桑作が盛んであったことがうかがわれます。

また、尾西市富田字上本郷辺りを古くから千軒鍛冶跡と伝え、鉄滓や木炭などが出土しています。鉄の原鉱は木曾川から採取される砂鉄で、刀鍛冶だけではなく、釜・鍋も鍛造していたようです。その後、鍛冶職人たちは美濃の関(岐阜県関市)へ移転したとされていますが、関で

ふるさとの街・探訪記



刀鍛冶が始まるのが元応年間（一三一九～一二）のため、移転の時期は鎌倉時代末頃かと考えられています。

鍛冶・製鉄の衰退には木曾川から直接砂鉄を得ることが困難になったと考えられ、さらに天正一四年（一五八〇）の木曾川の大洪水により、全く姿を消したと推定されています。

織田信長の治水事業

中島氏に代わりこの地で勢力を拡大したのが織田氏です。その台頭以前に、中島氏の居館と菩提寺である長隆寺（現一宮市）は兵火とともに炎上したと伝えられています。

織田氏の勢力拡大とともに家臣団の所領が尾張各地に散在しましたが、天文一八年（一五四九）信秀の判物（永室家文書）によると、地域の玉野は織田氏の直轄地でした。また、加賀野井に居館を構えていた加賀野井弥八も勢力をふるっていました。

天下を掌握した織田信長は、天正二年



（一五七四）、尾張国中の道を年に三回修築すること、橋は先例により架設した地元に修繕させること、用水導入路の維持を厳重に行わせることを命じました。

一方、同年正月二十四日には、祖父江秀重に、中島郡内一郷をして道根・横野堤を築造させるよう督促しています。この堤は、古木曾川分流（現日光川）左岸の一宮市秋原町築込、同西御堂から稲沢市生田・横野あたり、現尾西市玉野の対岸に築かれたもので、以後毎年修理するよう命じています。

その後、尾張を所領した織田信雄も父の政策を継承し、信長が築かせた堤をさらに北方に延長させる工事を実施しています。しかし、天正一三年の大地震と翌年六月の大洪水により、木曾川の流路はほぼ現在のように変わりました。

豊臣秀吉の治水事業

天正一四年の大洪水により、起村の西方にあった海老海道村は川底に姿を消し、加賀野井村は二分されました。また、尾張中島郡の中央を木曾川が貫いたた

め、木曾川を国境として、尾張と美濃の両国に中島郡が存在することになりました。この大洪水により、土田や家を失った農民たちは、両岸の川沿いに住居を移すか、新しい土地を探して移動しました。

織田信長に代わって天下人となった豊臣秀吉は、いわゆる太閤検地を行った後、文禄二年（一五九三）には尾張領内の荒廃地を調査して開発の準備や、堤防の修築を行うが、この場合働きに出た農民たちに飯米を支給することと定めています。

生産力を強化し恒常的な年貢米を確保するためには、農民に力をつけ、飯米を支給して労働による所得を保証し働く機会を与える必要があります。堤防修築による治水事業によって新田開発を図り、増収を意図したのでした。

こうして、文禄三年正月早々から西尾張、西美濃方面の農民たちが木曾川堤防修築事業に参加、その報酬として一日五合の米が支給されました。

修築事業は同年四月末には終わりましたが、改修した堤の規模は、中島郡堤約五万八千間、工事人夫は約六千人とあり、数字にやや疑問もありますが、河川の小規模修築をも含めたものかもしれません。

いすれにしろ、秀吉が大洪水より七年目に新しく出現した木曾川の本格強化を図ったのは、木曾の山林から搬出される木材流通路を確保するため、また、尾張平野の洪水被害を防止する治水工事の強

化により生産性の向上と新しい耕地開発を展望して巨額資金を投下したのでした。この修築事業で、荒川とよした跡地（河川敷は新田として開発され、古川新田などと呼ばれています。なお、木曾川という名称がこの頃から使われるようになったのも、この川の成立を暗示しています。

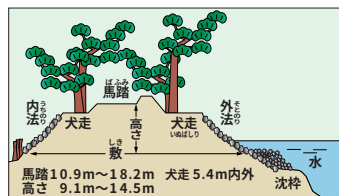
この堤防の修築工事はしばしば行われたようで、福島正則が清洲城主となった文禄四年以後、秀吉の四奉行が、木曾川だけに限らず、所々の堤防の切れ所を修築しているようです。

御囲堤と改修工事

関ヶ原の合戦以降、尾西市域は全域尾張藩領となりました。

慶長一三年（一六〇八）には、伊奈備前守忠次を総奉行として、現在の犬山市から海部郡弥富町に至る、木曾川左岸に延長約五〇kmに及ぶ大堤防の築堤工事が開始されました。工事期間は二年、いわゆる「御囲堤」の築造です。この大工事に、より数多くあった木曾川の支流は、さながら本流一本の木曾川となりました。

築堤工事の際、尾西市域内においては、小信と起の境で、小信川（五城川）と加賀野井川の二派に分流していたのを、小信川を築止め、加賀野井川を開拓して幹川とし、現在の





自昔請図

河道とした難工事が行われました。なお小信川の塞止め工事の実施は慶長一〇年だったという説もあります。

その後も尾張藩は何回となく堤防の補修工事を行っていたようですが、なにごと広範囲のため万全を期すことができず、天明年間（一七八

一～八九）に至り、当地の堤

防がいよいよ危険となりました。そこで天明二年（一七八二）及び天明四年、起宿本陣・加藤右衛門七（磯足）らの発起により自普請にて小信川築止め箇所及びその上下流数百間（約一〇）の補修工事を行いました。しかし小信川築止め以来水当たりは強くなり、年々河床が荒らされて堤防の破損が著しく、町家まで危険にさらされました。このため、尾張藩は寛政三年（一七九二）に改修工事を行い、堤防上の家屋を全部移転させ、三尺（約九〇）を嵩上げし、次いで寛政一二年にも改修工事を行いました。

御堀堤は当時としてはわが国最大級の大堤防でした。築造にあたり人柱となつたと三兵衛（与三）の伝説が残されています。

美濃路と起宿

江戸時代、尾西市域を走る美濃路は東海道宮の宿・熱田と中山道垂井宿を結ぶ重要な脇街道でした。慶長五年（一六〇〇）に整備された起宿は美濃路の中でも主要な宿場町でした。この辺りの木曾川は起川と呼ばれ、渡し場が置かれて人や馬を渡しましたが、時に川留めとな

り旅人が宿にあふれることもあり、城下町名古屋を中心とする領国経済の発展に伴って、木曾川は商品輸送路として

濃尾平野の大動脈となり、起湊は商品荷物の集荷地点として背後の集落の消費生活を支える湊町としても栄えました。幕末頃



金刀比羅社より見た起の瀧

には中野渡しや駒塚渡しも商いの船でにぎわうようになりました。※起渡船場と美濃路についてはVOL45で特集しています。

伊勢神宮の御神木川下げ

伊勢神宮は古来から式年遷宮が行われてきました。戦国時代には一時中断されましたが、天正年間織田信長が復興、御造営の用材を木曾山田立村に求めました。御神木の流通路には木曾川を利用、錦織より大山・円城寺を経て二ツ屋（尾西市域まで筏下り）、二ツ屋より伊勢大湊まで船または筏で輸送していました。

明治時代に入ると二ツ屋は廃止され、代わって起渡船場付近に停泊されることとなりました。御神木の奉迎の準備としては、休泊所



起渡船場跡

である金刀比羅神社河戸橋橋波止場に棧橋を新設、御神木を繫留するために青竹の矢来を組み、その中に祭壇を設けました。こうした設営は住民総出で行い、当日は奉祝の煙火が打ち上げられました。

織物業の発展と交通網の整備

尾西市の近世を特色づけるもうひとつは、綿織物の展開です。京都から技術を伝えて寛大寺綿や棧留綿を農間に織り出し、幕末頃には綿織物・結城綿を産出し、尾張綿の名で全国に知られるようになりました。

明治に入つて織物生産物は多様化し綿綿交織の全盛期を迎えましたが、明治二四年（一八九二）の濃尾地震で多くの工場や織機が損傷し、被害を受けました。その後、ボタン機が普及し、毛糸の着尺用セルや四幅の洋服地毛織物を展開し、尾西毛織物の基盤を形成しました。第二次世界大戦後、衣料不足によって農村部にも機業が浸透し、全国最大級の毛織物生産地に発展を遂げました。

尾西市域に鉄道が開通したのが明治三三年（一九〇〇）のこと。これに先立ち



かせくり（渡玉毛織）



伊勢神宮御神木の流送

関西鉄道現JR関西本線が計画されましたが津島を経由しないことが判明すると、地元篤志家が尾西鉄道を発起。明治二九年（一八九六）には弥富一宮間、二四kmに對し仮免許が下り、明治三三年、弥富一宮間が全通しました。この区間は、尾張地方で最も歴史のある私鉄で、平成二〇年には開業百年を迎えました。

現在の尾西市が誕生したのは昭和二〇年（一九四五）。翌年には濃尾大橋が完成し、羽島市などの交通アクセスが便利になりました。このほか、市域を走る交通網は、北部の名鉄尾西線、南部の東海道新幹線、名神高速道路など。平成一〇年には東海北陸自動車道の尾西ICが完成、同年一二月には、東名・名神・東海北陸と高速道路網が連結し、尾西から東京・大阪・北陸へのアクセスがますます快適になりました。



濃尾大橋開通・渡り初め

参考文献

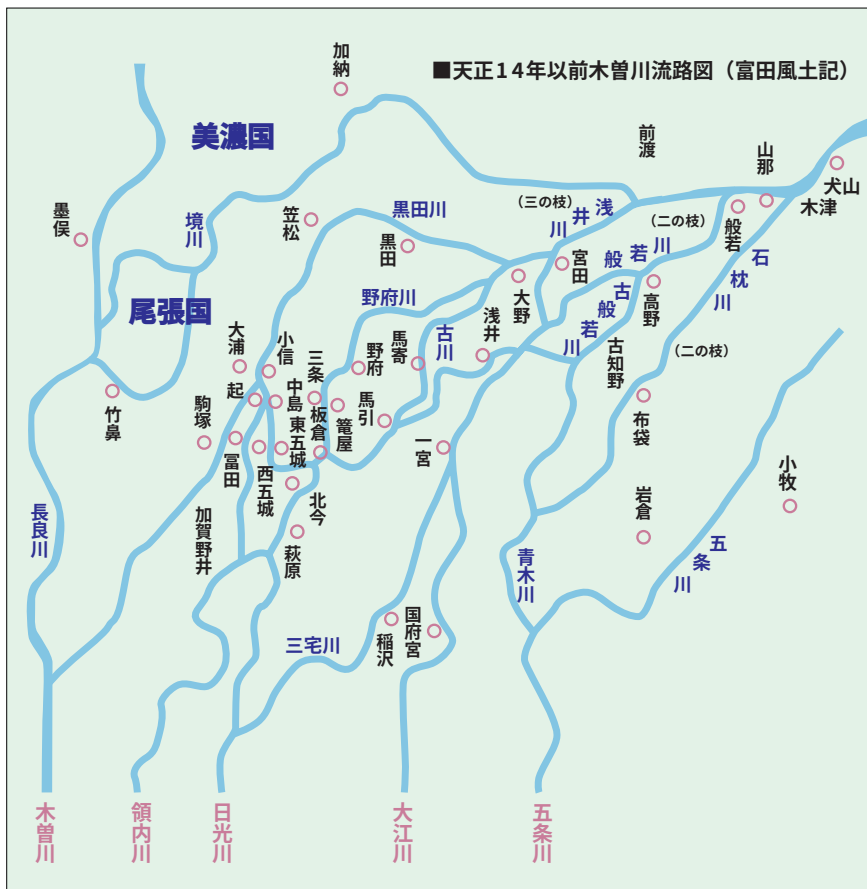
- 『尾西市史』通史編上下巻 平成二〇年 写真編 昭和六〇年 尾西市役所
- 『起町史』上巻 昭和二九年 起町役場 下巻 昭和三〇年 尾西市役所
- 『日本歴史地名大系』二三巻 愛知県の地名 平成元年 平凡社
- 『尾西市歴史民俗資料館 展示図録』昭和六一年 尾西市歴史民俗資料館
- 『尾西市市制四五周年記念市勢要覧』平成二一年 尾西市役所
- 『角川地名大辞典 愛知県』角川書店

日光川改修の歴史的変遷

日光川と近世の悪水対策

天正一四年（一五八六）以前の木曾川は、木曾八流と呼ばれ、主な流域だけで

八流あったといわれています（七流という説も）。尾西市域には、八流の内、日光川（古川・萩原川）と野府川があり、木曾川から分流した五城川（小信川）が流下し



日光川は往古の木曾八流のひとつ。尾西市域で野府川・五城川が合流し、豪雨のたびに氾濫し、悪水被害をもたらしていました。藩政時代にはすでに悪水組合が組織され、改修工事も行われましたが、大きな成果は得られませんでした。明治時代に入ると、蘇東耕地整理事業を実施。現在は日光川放水路事業が行われています。

ていました。これらはすべて日光川に合流しますが、三川いずれも昔は幅五〇間（九〇m）から百間（一八〇m）もある大河で、その名残りを今も農地にとどめています。これらの河川に加え、江川と称する細長い大池があり、しかも下流の浸漬がなされていなかったため、豪雨の度に各河川は氾濫し、大きな被害が発生していました。各河川を集める日光川には古来から完全な堤防はなく、屈曲狭窄がはなはだしい河川でした。

しかも下流の玉野及び西島地帯にあつては、俗に七曲がりと呼ばれるほど迂回屈折していたため、流下が著しく阻害され、土砂の堆積を誘致し、天井川（川床が周辺の土地より高い河川のこと）の様相を呈していました。しかも上流の野府川は幅が七八間（約一四〇m）もあるにも関わらず、支派川を合流した下流においては、新田開発のために耕地化されて川幅はぐんと狭くなり、その幅は三分の三四間に、したがって一旦豪雨にあうと水は川からあふれ、沿岸二里、約四百町歩の地帯は湛水数日に及び、悪水が逆流することもしばしばでした。

嘉永二年（一八四九）には玉野等の集落で河川改修の要望が起り、地方村々

代表で出願されました。官の調査の結果、従来の幅員約五間を二〇間とすべく許可が下り、自費請にて実施されました。

しかし状況はあまり改善されず、板倉の伊藤甚平が改修を率先して主唱しました。約千人の農民を動員して、第一着手として萩原町戸前の曲所を改修し、第二に玉野西島の七曲を着工しようとする時、停止を厳命されました。これは尾張藩の許可を得ていなかったため、甚平は牢獄に入れられた後、追放されたようです。一説には改修にまで及ばず、板倉付近の悪水の停滞に耐えかねて、下流日光川の堤防を切り放したため、暴挙として厳罰されたといわれています。

こうした状況下、すでに藩政時代から悪水組合が組織されており、常に排水に勤めていましたが、大きな成果は得られませんでした。

排水路を完成させた水野儀左衛門

天保一〇年（一八三九）水野儀左衛門は板倉村に生まれました。板倉は古川と野府川、五城川と日光川が合流する地点。古来、北方から排水が流入し、長雨や豪雨の時は、耕地一帯が浸水し、その被害は多大でした。

特に明治元年（一八六八）の入鹿切れ（現犬山市）以来行われた上



水野儀左衛門の碑

流の改修で年々被害が増大しました。儀左衛門は排水の必要性を唱え私費を投じて民衆を動かし、関係町村の協力を得て二本の排水路を完成させました。明治三六年（一九〇三）、儀左衛門は六六歳で亡くなりましたが、その徳を称えて同年四月、三条字郷内西の宅地の一角に、治水功績碑が建てられました。

蘇東耕地整理組合事業

日光川流域では近世より治水工事が実施されましたが、大きな成果は得られず、明治時代に入ってから改修工事の必要性を数度に渡って訴えてきました。改修が現実味を帯びてくるのは明治中旬。明治二年（一八八九）には、日光川通りのうち、玉野・西島地内の修築の必要性を青樹中島郡長より愛知県知事に向けて建議しました。翌年には日光川水路で



野府川・日光川の合流点(昭和5年)

被害の多い萩原町戸畑や玉野・西島で許可を得ず小堤防を造っていたため上流の町村よりこれを除去するよう訴えがあり、郡はこれを除去するように命じました。こうした状況下、明治三九年（一九〇六）には、日光川改修を目的として蘇東耕地整理組合発起人会を朝日村の興安寺において開催。事務所を萩原町の實光寺に設置しました。明治四〇年には愛知県知事に施工認可を申請し、ついに許可を得ました。

明治四一年の起工式から昭和初期にかけて、日光川、野府川の改修、用水の整備、耕地の整理が行われ、そのための詳細な図面が作成されました。

工事がほぼ完成した大正七年（一九一八）、記念碑を建設。昭和二年（一九一七）二月には事業が完了し、組合は解散しました。この三〇年にも及ぶ事業により、多くの住民は水害から解放されまし



蘇東改耕碑

た。昭和一〇年には引き続き地内の灌

漑及び排水を行い、整理事業をいそう効果的なものにするために、蘇東用悪水普通水利組合が設立されました。



昭和5年三条小学校隣にあった蘇東耕地整理組合事務所

昭和の日光川改修事業

《昭和の日光川概要と水害》

昭和二〇年代以降になると、日光川の改修は定期的に実施されるようになりま



昭和34年 伊勢湾台風・市役所の被害

した。というのも日光川流域は名古屋市内に近接する地理条件から都市化が進み農地

が宅地へと姿を変え、従来保有していた保水遊水機能が失われ、洪水流出量が増加しているためです。こうした状況下、昭和二



三条の五色町（昭和36年集中豪雨被害）

六年に改修事業に着手、以来、半世紀にわたり営々と続けられています。この間、昭和三四年の伊勢湾台風をはじめ幾多の大きな災害が発生しています。昭和三

六年六月二四日の集中豪雨は、雨量計で四四五mmを記録。尾西市の八割が泥水につかり、災害救助法の適用を受け、自衛隊も派遣されました。また、昭和四九年七月の豪雨では床下浸水約千八百戸、湛水面積約一万二千haの被害をこうむり、昭和五一年九月の一七号台風と豪雨で目比川が決壊、床下浸水約四千六百戸、湛水面積、約一万六千haの被害があり、平成二二年九月の豪雨においても甚大な被害が発生しています。

日光川の河川改修は、当面の目標である五年に一度の確率で降るとされる豪雨への対応に長い年月を要する状況です。

《内水排水ポンプの状況》

日光川流域は、の地方有数の穀倉地帯でもあり、国や愛知県による農地の灌漑排水事業により、湛水排除のための排

水施設の整備が進められています。昭和四〇年代から五〇年代にかけては急速な地盤沈下により、海拔〇m地帯は流域の半分まで拡大し、流域の内水排水ポンプの総容量が七三、三m³/S（昭和三三年）から五一、五m³/S（平成四年）へと急増しており、今後とも増加すると予想されています。

《河口ポンプの位置付け》

日光川は河口部を締め切り、水門を設置することで高潮と洪水に対処してきました。しかし、昭和四九年・五一年豪雨の浸水被害、都市化の進展に伴う流出量の増大及び地盤沈下による排水能力低下に対応するため、昭和五三年に河口に現在の排水機場を設置し、高潮と洪水に対処しています。

《三・四号放水路の計画》

日光川改修においては、流下能力が不足している中下流部への洪水流量の低減及び中上流部の悪水による被害の解消を図る洪水対策が求められました。

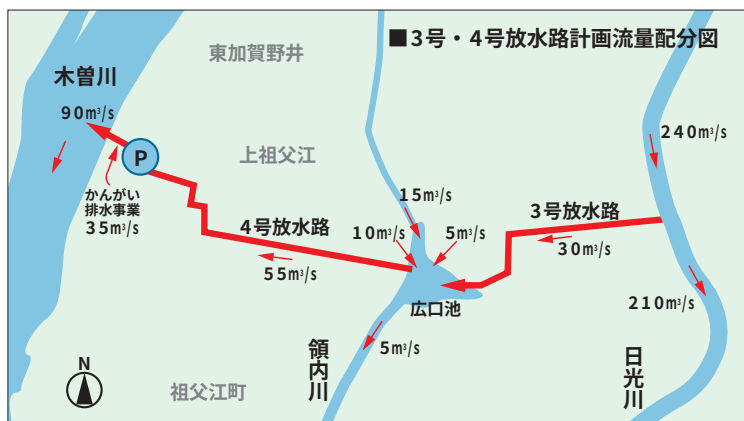
対策としては、まず河道拡幅案が基本となりますが、これまで日光川では改修計画を変更する度に用地取得を行い、河道拡幅や堤防嵩上げを三度も繰り返しています。しかし、度重なる河道拡幅は、多くの土地利用者の理解と莫大な補償が伴う上、橋梁等の改築も必要となり、現実的ではありません。

次に考えられたのは、河道掘削案でした。しかし、現在の計画は、河口部の河床を名古屋港と同じ深さまで掘り下げる計画であり、これ以上掘削しても効果が得られないことから洪水対策としては考えにくいものであります。

このようことから、日光川の洪水を流域内で処理することが困難であるため、洪水の一部を木曽川へ排水する放水路が必要となり、現在、日光川三・四号放水路事業を推進しています。

《西中野排水機場の計画》

西中野排水機場は、愛知県尾西市西中野地区に建設中の排水機場です。日光川と領内川の洪水時に、日光川からの三



さらに、洪水の一部を貯留する遊水地案が考えられましたが、すでに流域内の農用地は可能な限り自然遊水効果を見込んで計画されており、数十ha規模のまとまった用地を必要とする遊水地の設置は社会的影響が大きく現実性がありません。

このようことから、日光川の洪水を流域内で処理することが困難であるため、洪水の一部を木曽川へ排水する放水路が必要となり、現在、日光川三・四号放水路事業を推進しています。

■参考文献
 『尾西市史』通史編上下巻 平成一〇年
 写真編 昭和六〇年 尾西市役所
 『起町史』上巻 昭和二九年 起町役場
 下巻 昭和三〇年 尾西市役所
 『中小河川改修事業 日光川放水路
 西中野排水機場(仮称)』愛知県
 『わたしたちの尾西市 教師用資料集
 平成一四年 尾西市教育委員会

○ m^3/S と領内川の二五 m^3/S を合わせた五五 m^3/S の流量を木曽川へ排水するための施設です。機場本体部分と前池部分と管理ゲートから構成されています。

現在、平成一六年二月の竣工を目指し、工事が着々と進められています。

なお、この排水機場の建設地の周辺には、民家や工場が近接しており、低騒音・低振動の施工法を採用するとともに、地下水を低下させないで掘削する対策を図つていく。

しかし、不測の事態により周辺に影響が生じないように、地下水の観測孔を周辺に設置し、地下水位の監視や、騒音・振動測定を施工に先立って実施しています。

今後は施工中、施工後においても調査を行い、施工による影響の監視を行うこととしています。



店口池



西中野樋管

ボイス・ギャラリーは本誌へのご意見や地域の情報などを紹介するコーナーです。
今回は多数のご意見の中から、次の皆様の声をご紹介します。

多摩美術大学教員 渡部一二さん

農業土木の水利遺構の研究や再生の提案をしています。木曽川水系内で農業水利に関する水利遺構がどんな形で残っているのを知りたいと思っています。今後の「KISSO」を楽しみにしています。

愛知県長久手町在住
永田宏さん

前号より活字が大きくなり、読むのが楽になりました。なお、次の件をお願いします。

二 来春には五〇号になりますので、第一号からの総目次（索引）を掲載してください。以後は一〇号毎にその間の総目次を掲載していただけるとありがたいと思います。

九州東海大学 工学部長 渡辺千賀恵近さん

一三年間にわたり本巢郡真正町内に住んだこともあり、いつも『KISSO』を楽しくかつ懐かしく拝読させていただいております。

特集「川と街道」は出色の企画だと感じております。木曾川は、各時代の社会・生活・経済などに、どのように影響してきたのか。そうしたことを教えてくれるからです。視野を「河川」のみに限定しない、こうした内容も大切だろうと思われます。半面、読者は各号ごとに読みますので、内容の全体的な流れがつかみにくい難点があります。季刊の宿命であります。そろそろ一冊の本にしたいですね。とつれいひですが、CD版ならば安価ですし、教材としても使いやすいでしょうか。

治水に関わる記念碑や水
神様などの資料（場所・概
要・写真等）をご提供くだ
さい。

気ままに
JOURNEY

尾西市

尾西市の輝く女性たち

明治という時代を、大正ロマンの中を、駆け抜けた女性たちがいた。内なる情熱は熱く、志は高く。決して夢をあきらめることなく、女性洋画家として、はたまた婦人運動家として、光彩を放ったのである。市川房枝と三原節子。輝く女性たちのふるさと、尾西市。水と光と緑にあふれたこの地は、豊かな感受性をも育んだのであろうか。彼女たちが愛したふるさとには、木曽川が今も美しい川面をみせている。

木曽川の恵みとともに

東海北陸自動車道の二宮西インターから西へ車を走らせると、ゆったりと流れる木曽川が美しい水面をみせています。今ではすっかり穏やかな木曽川も、かつては木曽八流と呼ばれた暴れ川。ひとたび大雨が降れば濁流が逆巻ぎ、大切な家も田畑も奪い去っていたのです。木曽川左岸に今も名残りをとどめる御囲堤は、桜並木が続く美しい所。大きな犠牲を払った治水工事でも水に泣いた人々の涙も知らぬかのように、さわやかな川風が吹き抜けて

美しい風景が広がる木曽川

いきます。濃尾大橋に程近い

富田山公園ではお弁当を広げた親子連れがのんびりとくついでいます。濃尾大橋は毎年、迫力満



昭和30年頃の起の水泳場

点の花火が夜空を焦がす所。一方で氾濫を巻き起こす水も、やはり大切な恵みの水です。木曽川への感謝の気持ち、尾張でも有数の夏祭りを育て上げたのです。この辺りはまた、昭和三〇年代まで水泳場だった所。子どもたちは水しぶきをあげてはしゃぎ回り、休憩所ではお母さんたちがおやつのスィカを用意しながら、子どもたちの姿をまぶしそに見守っていました。



↑川祭りのまきわら船

←起の川祭り(昭和10年頃の名鉄の広告)

水と光と風と。素晴らしい自然は子どもたちにとって、かけがえのない教科書です。そして自然というふところの深さが、日本を代表する女性たちを送り出したのでしうか。婦人運動家として大きな功績を残した市川房枝、「女流ゴッホ」と称される三原節子は、ともに尾西市出身です。

婦人運動に生涯を捧げた市川房枝



市川房枝氏

市川房枝は、近代女性史の中でも、ひととき強烈な光芒を放つ巨星です。そんな房枝のニックネームの一つが「だいの花」。これはそのまま随筆集のタイトルにもなっていますが、そのあとがきで房枝は「紫の花ではなく、白の花の方」とこたえ、「百姓の娘に生まれ、何の化粧もせず、泥くさい、しかし清浄をのぞむにさわしい」と書いています。尾西でだいの栽培が普及したのは享保年間(一七一六～三〇)。この頃になると農業の生産性も向上してきたようです。ふるさとに広がるだいの畑は、彼女の原点だったのでしょうか。そんな房枝が最初に反骨精神をあらわしたのは、愛知県立第二師範学校の四年生の頃で

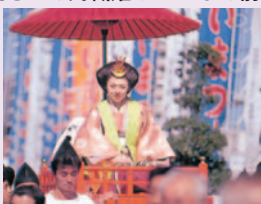
す。良妻賢母主義の教育に反旗をひるがえし、級長として不満を抱く全同級生二十八人を指揮。「愚劣な良妻賢母主義に対する不満二八ヶ条」をつづけて、授業をボイコットしたのです。後に房枝の盟友となる平塚らいてうも、お茶の水高女時代に良妻賢母主義に凝り固まった授業をボイコット。日本を代表する二人の女性運動家は奇しくも、学生時代からその頭角をあらわすことで一致していたのです。以後、名古屋新聞(現中日新聞)の女性記者第一号として、また、平塚らいてうとともに戦前の婦人運動をリード。戦後、参議院議員にトップ当選したとなく、華々しいプロフィールは枚挙に暇がないほどです。しかし、そんな房枝にも彼女自身「格子なき牢獄」と呼んだ闇の時代がありました。戦後、GHQによる追放令の発令ですべての公職から追放された時のことです。その理由は、言論国報会をはじめ数々の公職に就き、銃後の戦争協力を展開したとなどが推察されますが、真相は闇の中。ともあれ、GHQによる婦人の公職追放はわずか四～五人。その中に名を連ねているのですから、彼女の存在がいかに大きかったのかをうかがい知ることができます。

尾・西・市・の・歳・時・記

◆びさいまつり◆

日時:10月第4日曜日と前日 会場:市民会館~第一中学校

もともとは織物産業の発展を願って昭和40年から行われてきた服飾文化祭(のちの産業まつり)。これを平成元年に市民が主役のまつりにしたものが今の「びさいまつり」。まつりを華やかに彩る織姫と童女は、毎年、市民から選ばれる尾西美人そっくりです。織姫のパレードの前後に、手作りみこし、仮装パフォーマンスが沿道を盛り上げ、野外ステージや特設会場では、ショーや大道芸、ふるさと芸能大会など盛りだくさん。尾西人の情熱が炸裂します。



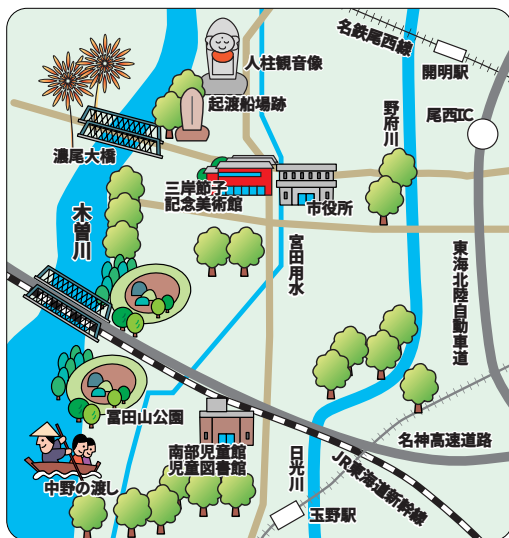
◆尾西市夏まつり◆

日時:8月13・14日 会場:濃尾大橋付近

木曾川の恩恵を受けてきた人々が、明治25年に始めた水天宮に奉納する川まつりを継承して行われる『夏まつり』。水面に浮かぶ五艘のまきわら船には、三百六十五の堤灯が揺らめき、夜空には、大輪の花火五千発が打ち上げられます。大河木曾川ならではの二十号の大玉は、尾張随一の迫力で観るものを魅了します。尾西市夏まつりは、華やかでいて厳かな、真夏の一夜を演出します。

尾西市 EVENT INFORMATION

4月上旬	桜まつり(尾西緑道ほか)
6月上旬	あじさいまつり(三条御愛神社)
8月13・14日	尾西市夏まつり(濃尾大橋付近)
10月第4日曜日と前日	びさいまつり(市民会館~第一中学校)
11月中旬	もじまつり(歴史民俗資料館別館)
12月	ホワイトイルミネーション(市役所西側駐車場)



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋IC 東名・名神・東海北陸高速道路 (約20分) 一宮西IC (約10分)

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 JR東海道本線・名鉄名古屋本線 (約15分) JR尾張一宮駅 名鉄バス (約15分)

●お問い合わせ●

◆尾西市役所◆

〒494-8601 尾西市東五城備前12番地 TEL 0586-62-8111 (代)
http://www.city.bisai.aichi.jp/

情熱の画家 三岸節子

女性洋画家の先駆者であり、日本の画壇を代表する三岸節子。情熱的で色彩あふれた作品は、節子のドラマティックな生涯から生まれたものでしょうか。

昭和五十六年、房枝は心臓病で倒れ入院。市から名誉市民の称号が贈られましたが、二月二日、永眠しました。

昭和二五年、追放を解除された房枝は、コエモスが咲き乱れる自宅の前で、新聞社のフラッシュを浴びました。以後の活躍は、もはや言うまでもない事実です。その房枝が晩年、「占領政策には功罪もあるが、この婦人問題に関しては、その民主化への実現という点で、アメリカを評価しなければならぬ」と語っています。「権力の上に眠るな。これは房枝の生涯を貫いた自身の言葉。晩年、姉たまの遺産が市に寄付され、房枝が相続放棄、それをもとに南部児童館と児童図書館、また吉藤市川公民館が建設されました。



←三岸節子画伯



画伯が愛した小物で飾られたアトリエ

と反抗心は、後年の激しく強い性格と反骨精神を育てたようです。不況のため生家が破産する中、節子は画家になる夢をあきらめきれず、家族を説得して一六歳で上京、女子美術学校に入学します。しかし、女子美術の行儀のよき世界にはもの足らず、学校外の同人展に度々参加、この中に若き天才画家として脚光を



三岸節子画伯の作品
左「白い花」(ヴェロニにて) (1989) 右「花」(1989)

これらすべてを自身のエネルギーとして生涯画家を貫いた節子。デュライ、マチス、ボナールなどのフランス絵画の影響を受け、やがて作風は古代美術の生命力あふれるようなものへ変わります。単純化されたモチーフや、塗り込みと削りを幾度となく繰り返し、豊かな色彩による表現などから、「女流ゴッホ」の異名をもつ世界的なアーティストとして成長を遂げた

浴びていた三岸好太郎がいました。彼と結婚した節子は、三人の子を産み育て、主婦としての生活を双肩に担いつつ、大正一四年(一九二五、二〇歳で女性として初めて「自画像」など四点が春陽展に入選しました。その一方、ライバルでもあった夫とも激しくぶつかりますが、それは好太郎の急逝で幕を下します。その時節子は、ああ、これで私が生きられると感じたそうです。これには、夫とともに芸術家でありながら、女にのしかかる家の役割の重みに、才能までも押しひしがれる痛みと吐息がこもっているようです。

イメージした水路や現存する土蔵を生かし、愛用の品々を展示するなど、在りし日の画伯をしのぶことができるといいます。毛織物工場をモチーフとした建物、画伯が好んで描いたヴェネチアをイメージした水路や現存する土蔵を生かし、愛用の品々を展示するなど、在りし日の画伯をしのぶことができるといいます。毛織物工場をモチーフとした建物、画伯が好んで描いたヴェネチアをイメージした水路や現存する土蔵を生かし、愛用の品々を展示するなど、在りし日の画伯をしのぶことができるといいます。



鋳屋根が印象的な三岸節子記念美術館

画家の旺盛な生命力、優れた集中力は、様々なエピソードを生み出しました。例えば、キャンパスに向かう前には、必ず数珠を手に祈ることにより、時には一日中食事も忘れ、絵筆を握ることもあったそう。で平成一一年九四歳で亡くなった際にも、手に絵の具がついていたようです。昭和八三年には尾西市の名誉市民に、平成一〇年には三岸節子記念美術館がオープンし、画伯の生涯にわたる作品を収集・展示しています。毛織物工場をモチーフとした建物、画伯が好んで描いたヴェネチアをイメージした水路や現存する土蔵を生かし、愛用の品々を展示するなど、在りし日の画伯をしのぶことができるといいます。

特集 輪中と農業

第一編

農業の進展とその課題

農業はわが国の代表的な産業です。古代より盛んに農地開発や水開発が行われてきました。近世になると徳川幕府は積極的に新田開発を奨励し、輪中地帯でも数多くの水田が開かれました。しかし「三年に一度収穫なし」といわれるほどの惨状。多大な労力を擁し、輪中ならではの堀田や堀潰れが形成されていきました。この独自の農地の形態と悪水対策、運営方法などを中心にシリーズで紹介します。

日本の農業の始まり

稲作と畑作が日本列島に伝えられたのは紀元前三百年頃のこと。おそらく大陸からの渡来人によって伝えられたもので、同時に大陸ですでに数千年にわたり栽培された技術大系をもったものでした。

福岡県の板付遺跡から発掘される遠賀川式土器は稲作農業の端緒を示すもので、以来急速に日本列島に広がりま

した。濃尾平野への伝来は紀元前約二百年頃。名古屋市区の西宮賀遺跡はこの地域で最古の弥生遺跡です。また、弥生遺跡は美濃平野と東濃地域の一部、飛騨盆地の一部にも存在しており、この頃から濃尾平野に普及していったようです。

古代から中世の農地開発と水利利用

大和朝廷は公地公民の制度のもとで農地開発に努め、荘園制度以降も盛んに農地開発されるようになりました。

古代の水田は流域面積が狭く水量の少ない小河川や溪流を水源として開かれていた場合が多く見られます。したがって、これらの地域では非灌漑期の流水を貯留する貯水池を築造するなど、乏しい水源の水を確保して水田に利用している厳しい水利慣行を持つ場合が多かったようです。しかし、木曽三川水系はわが国でも最も水が豊かな地域であり、渇水時に水不足で悩むことは当時でも比較的少ない流域でした。

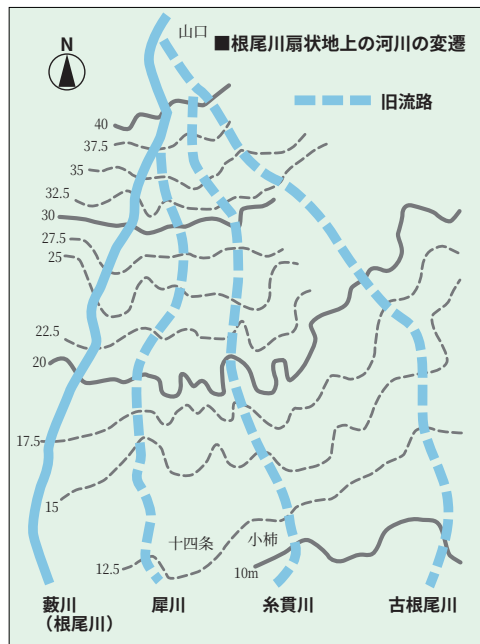
定観八年（八六八）におきた広野河事件は、当時の河道安定と洪水による利害が事件の中心課題でしたが、水利の観点からも検討に値する問題でした。当時、木曽川派川からこのようにして灌漑用水を確保していたか記録は残されていませんが、江戸時代の記録をみると、おそらく玉石等で川を堰き上げて、用水を取っていたのだらうと考えられます。この堰き上げは、洪水の度に流されるので、その都度、積みなおさなければなりません。しかし、流路変更により木曽川の本流となって洪水流量が増加し、流速が増

せば、堰き上げた石積は早くこわされてしまっただけではなく、その石積により洪水の水位がより上昇するので、氾濫の危険は増加します。

こうした状況に対応するために利水をも目的とした治水工事は実施されましたが、尾張国と美濃国の利害が一致しな

かったため、事件に及んだようです。いずれにしろ、平安中期の中央官と豪族の勢力構造をうかがうことのできる事件だといえます。中世に開発された農業用水は小規模なものが一般的でしたが、この時代の記録に残されたものとして、美濃国では忠節用水と席田用水があります。

長良川を源流とする忠節用水の起源は明らかではありませんが、応永十二年（一四〇五）の干ばつには忠節用水の受益地から御祈禱料として玄米二石を神宮



に献上した記録があります。

席田用水の起源も明らかではありませんが、その水源は揖斐川支流根尾川で根尾川扇状地に灌漑する美濃平野最大級の用水でした。

根尾川は、山口村地点から下流でしばしば流路を変えています。古くは古根尾川、つぎには犀川、その後に糸貫川に本流が移りました。さらに、享禄三年（一五三〇）の大洪水で揖斐川に合流する根尾川となり、糸貫川は長良川に合

輪中名	石高(石)	内 訳(石)
河 渡	6,680	御料 2,176 安藤対馬守領分 4,504
牛 牧	10,235	御料 7,740 尾張領 2,330 奥山、三洲領 165
牛 牧	10,235	御料 408 戸田采女正領分 1,462 西尾領 235
墨 俣	5,400	御料 2,342 尾張領 1,652 戸田采女正領分 1,406
福 東	11,247	御料 11,247
大 吉	2,143	尾張領 1,416 戸田采女正領分 727
森 部	3,701	尾張領 3,047 奥山、三洲領 509 別所領 145
高 須	31,486	御料 10,950 尾張領 6,473 松平摂津守領分(高須) 12,729 青木領 993 日根野領 341
高須輪中の内(本町)	3,764	御料 3,764
高須輪中の内(口原)	1,346	御料 1,346
桑 名	12,005	御料 4,708 尾張領 6,212 林、土岐領 393

表1) 各輪中の石高、村名、所領の一覧

（表1）に示すように輪中地帯でも、一つの輪中に幕府領、大名領、旗本領が入り混じっていました。

最も大規模な高須輪中では、高須藩松平領、天領、尾張領、旗本青木領があり、中でも内記という集落では、天領、青木領が複雑に入り組んでいます。

江戸時代初期に開発

農地開発と水利開発に関しては、美濃平野と尾張平野は対照的でした。その原因は地形的な相違にもありますが、尾張国が尾張藩だけで統一的に支配していたのに対し、美濃平野では天領、尾張

近世の美濃平野の農地開発と水利開発

享禄五年（一五三二）、天文一二年（一五四三）にもこの一帯では論争が発生。このように中世になると現在に原形の残るいくつかの用水が整備されましたが、それをめぐる論争は近世にいたっても続いています。

流する一派川となりました。

こうした流路変更は、根尾川を水源とする受益地帯の間でしばしば論争を引き起こしていました。

例えば、糸貫川から取水していた席田用水の受益地帯では干天が続くと水量が枯渇して用水が不足、干害が発生しました。その上、扇状地の水田であることから単位用水が大きく、その取水をめぐって論争も激化。このため、用水の取水慣行は厳しかったようです。

郡 名	領主名	村 名	新開高(石)	郡 名	領主名	村 名	新開高(石)	郡 名	領主名	村 名	新開高(石)
不 破	幕 領	綾 野	215	安 八	大 垣	釜 笛	①2,120 ②620	海 西	幕 領	立 野	100
多 芸	大 垣	多芸島	103	安 八	大 垣	禾ノ森	③1,150 ④970	大 野	幕 領	三 輪	370
多 芸	尾 張	上 笠	100	安 八	大 垣	花 外	⑤956 ⑥130	中 島	尾 張	堀 津	105
多 芸	尾 張	上 付	937	安 八	大 垣	古 宮	⑦423	羽 栗	尾 張	柳 津	359
多 芸	尾 張	舟 付	630	安 八	大 垣	今 村	307	羽 栗	尾 張	西小熊	340
多 芸	尾 張	鳥 江	144	安 八	大 垣	難波野	⑧141	加 茂	苗 木	山之上	229
多 芸	高 須	有 尾	1,397	安 八	大 垣	土 倉	327	武 儀	尾 張	黒 川	133
多 芸	高 須	根古地	676	安 八	大 垣	鹿 野	421	可 児	尾 張	上有知	141
多 芸	高 須	大 場	459	安 八	大 垣	大和田	400	惠 那	尾 張	兼 山	272
石 津	大 垣	下一色	1,051	海 西	幕 領	松ノ木	299	惠 那	尾 張	日比野	327
石 津	大 垣	東駒野	1,001	海 西	幕 領	野 寺	230	土 岐	岩 村	福 岡	146
石 津	高 須	馬 目	67	海 西	幕 領	長久保	104	土 岐	岩 村	駄 知	100
石 津	高 須	札 野	317	海 西	幕 領						
石 津	高 須	高 須	202	海 西	幕 領						

註) ①浅草新開 ②内河原新田 ③築捨新田 ④川口新田 ⑤南外洲 ⑥一本木新田 ⑦米野新田 ⑧牧新田

表2) 新開高100石以上の村名(美濃/正保2年)

された農地を領主別にみると、大垣藩の九二〇三石を筆頭に、高須藩五〇二九石、尾張藩四三二七石等合計二万二九六七石に達しています。

また、新田百石以上の農地開発を行った村は（表2）の通りです。

このように、村によっては千石以上開発した村が五カ村にも及んでおり、また開発が多い郡は多芸郡、石津郡、安八郡、海西郡の輪中地帯でした。これらの低地には、この当時まで各所に未開発の湿地帯が存在し、これらの湿地帯が急速に開発されたのです。

河川名	用水名	取水地点	受益面積(ha)	摘 要
長良川	剣用水	郡上郡白鳥町為真	313	成立推古天皇の時代(593～627)といわれる、寛文年間(1661～71)修理
長良川	曾代用水	美濃市曾代	約1,000	1663(寛文3年)喜田吉右衛門等3名が私費でつくる
長良川	忠節用水	岐阜市金華山下	約700	古来この地で取水、1612(慶長17年)取入口新設
揖斐川	五ヶ村用水	揖斐川町房島	274	1625(寛永2年)美濃郡代岡田善同が開発
揖斐川	西郡用水	揖斐川町三輪	435	はじめ衣斐用水と同じ地点であったが1616(元和2年)郡代岡田善同が分割
揖斐川	衣斐用水	揖斐川町三輪	373	同上
揖斐川	大御堂用水	揖斐川町三輪	128	創設不明
揖斐川	脛永用水	揖斐川町東野	155	同上、寛文年間(1661～1672)の絵図あり
根尾川	席田用水	本巢町山口	4,158	同上、上流より更地方、席田方、真桑方とそれぞれ分水権利複雑
(揖斐川水系) 粕川	粕川一ノ井水(池田用水)		527	中世未開さく、元和2年(1616)対岸で取水する小島用水と水争岡田善同の調停で等分分水
(揖斐川水系) 三水川	政田用水	揖斐川町瑞岩寺	約290	1530(享禄3年)大洪水で藪川ができてさえざられ、藪川等を水源としたが、宝暦年間(1751～1763)再び三水川から引水(藪川に伏堤をつくる)
(揖斐川水系) 粕川	小島井水	揖斐川町	311	(粕川一ノ井水参照)
(揖斐川水系) 平野井川	柿之木戸用水	大垣市大島地先右岸	1,689	はじめ揖斐川から取水していたが揖斐川改修昭和5年(1930)で取水できなくなり平野井川とした
(揖斐川水系) 杭瀬川	宇留生用水	池田町市橋	336	開発起源不明

表3) 近世に存在した100ha以上の農業用水

なかつたため、長期に湛水する生産力の低い不安定な水田でした。

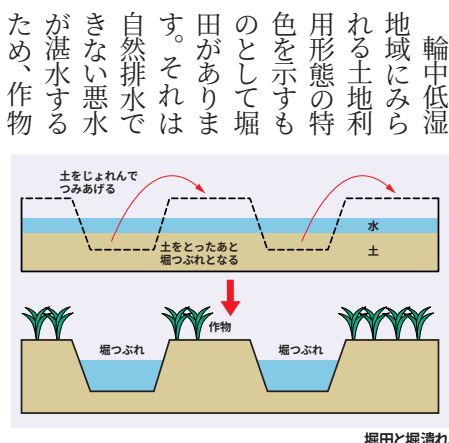
近世の美濃平野の農業用水は、尾張平野の比べるとその規模は小さいものでした。これらの用水の中で、百ha以上の規模をもつものは（表3）のようでした。このうち最大規模のものは、席田用水の四一五八ha。中世に原形をもつこの用水では、取水をめぐる論争も多発していました。

また、曾代用水千haは民間の資金で、複雑な封建領主間の土地支配の中で苦勞して完成させた特異な用水です。

例えば大垣輪中南部の浅草地帯では、中世末期の大永年間（一五二一～二八）に横曽根新田が開発されましたが、大垣藩ではさらに残っていた湿地帯において、正保年間（一六四四～四八）に浅草東中、西の三村を開発しています。次いで承応二年（一六五二）に横曽根吹ケ原新田（六八七石）を開発しました。

これら輪中の湿地帯を開発した新田では、洪水時には自然排水の他、内水排除の方法が

堀田の成立



堀田と堀潰れ

三内陸埋立 四土地改良のステップ

を経て、徐々に推移してきました。堀田は第二段階の悪水処理対策の時代に出現し、第三段階の内陸埋立によって消滅する土地利用形態です。また、輪中の形成、推移の過程で生じた矛盾の所産であるといえましょう。

洪水から集落や耕地を守るために築造された懸廻輪中の完備は、逆に内部の悪水停滞、すなわち悪水処理困難という問題に直面しました。このような動向は上流輪中でも認められています。安藤萬壽男の研究によれば、安八郡中州村（現在の安八郡安八町の一部）では、領主に納めた上納米が、江戸末期から明治初頭にかけて減少しています。それらは湛水田からくる減収だとしています。この頃は、一反部から三〜四升しか収穫がない時が時々あり、食糧に困って稗や湿田に多くとれるたにし（この地方ではつぼと呼ぶ）を食べたという話が残っています。

このような土地利用は美濃平野だけのもではなく、利根川中流域の赤朝沼より見沼代にかけても見られ、その地域の呼称では丸ぼこまたは丸堀沼といっています。さらに、信濃川下流の鰐湯近傍、筑後川下流などにも見られました。

輪中の矛盾、悪水問題

近世の新田開発のもと形成された輪中ですが、その形成過程は
一 洪水防御対策
二 悪水処理対策



油島喰違堀絵図（長谷川千代子蔵）

築造による河川の水位上昇とその川床上昇による内面の相対的低下が大きな要因と考えられています。

輪中が成立する以前は堤内と川床の相対的比高は少なかったのですが、周囲を完全に堤防で囲む懸廻堤の完成は洪水防衛には最適な一方で、堤内の排水を困難にしたのでした。したがって、せっかく開発した新田も耕作不能な低湿地に逆戻りするありさまでした。

こうした悪水への対応として行われたのが、江下げと堀田の造成です。

江下げは、排水路を下流部に延長して本流と合流させ、悪水排出を促進させようとするものです。しかし、水位差による自然排水は下流部では干潮時でない限り開扉できない制約があり、また、川床の上昇は排水機能の障害となり、効果は必ずしも完全ではありませんでした。

大垣輪中の悪水対策

大垣輪中の南部地域の五カ村は、悪水を排水するため安永六年（一七七七）、揖斐川床下に伏越樋という悪水のための水路を埋め、揖斐川下流で放出するという大規模な江下げの工事を行いました。結果、約二五〇町歩の田畑が良田化。この

成果をみて、古宮、今村輪中村々はじめ多くの村が参加して、天明二年（一七八二）、悪水を



伊藤伝右衛門画像（片野記念館蔵）

排水する伏越樋の設置を幕府に申請しました。

翌年、許可されて工事に着手。大垣藩の郡奉行伊藤伝右衛門が指揮をとり、日夜工事を督励した結果、計画通り工事は天明四年（一七八四）春に完成しました。しかし、設計上の誤算から、さらに下流の塩喰村最南端まで悪水路を延長して、根上村対岸で放流する計画に修正し、天明五年に工事を完成させました。

この工事によって、悪水の排水がスムーズになり、荒地となっていた耕地での作付けが再び可能になりました。伏越樋は木造であるため、以後は三〇年ごとに伏せ替えをして悪水の排水に絶えず勤め、輪中内での荒廃を防いでいたのです。

参考文献

- 『木曾三川流域誌』 建設省（現国土交通省） 平成四年
- 『輪中と治水』 岐阜県博物館友の会 平成二年
- 『輪中と治水』 岐阜県小学校社会科研究会 昭和五十七年
- 『輪中』 大垣市輪中館 平成四年
- 『輪中―その展開と構造―』 古金書院



輪中の農業

長島町 輪中の郷主査 諸戸 靖氏



諸戸 靖氏

生年月日 昭和31年2月13日
 最終学歴 関西大学 文学部史学科
 職歴 昭和54年から桑員地区にて小学校に勤務
 平成2年から長島町職員(輪中の郷に勤務)
 現在、輪中の郷主査
 著書 木曾川(共著)
 論文 昭和初期の木曾三川下流域の状況と東南海地震による影響(99年土木史学会)

長島町西川地区に於いて古老のメモが残されていたため、昭和初期の水郷地帯の農業について述べたいと思います。

昭和初期の長島町の農業形態

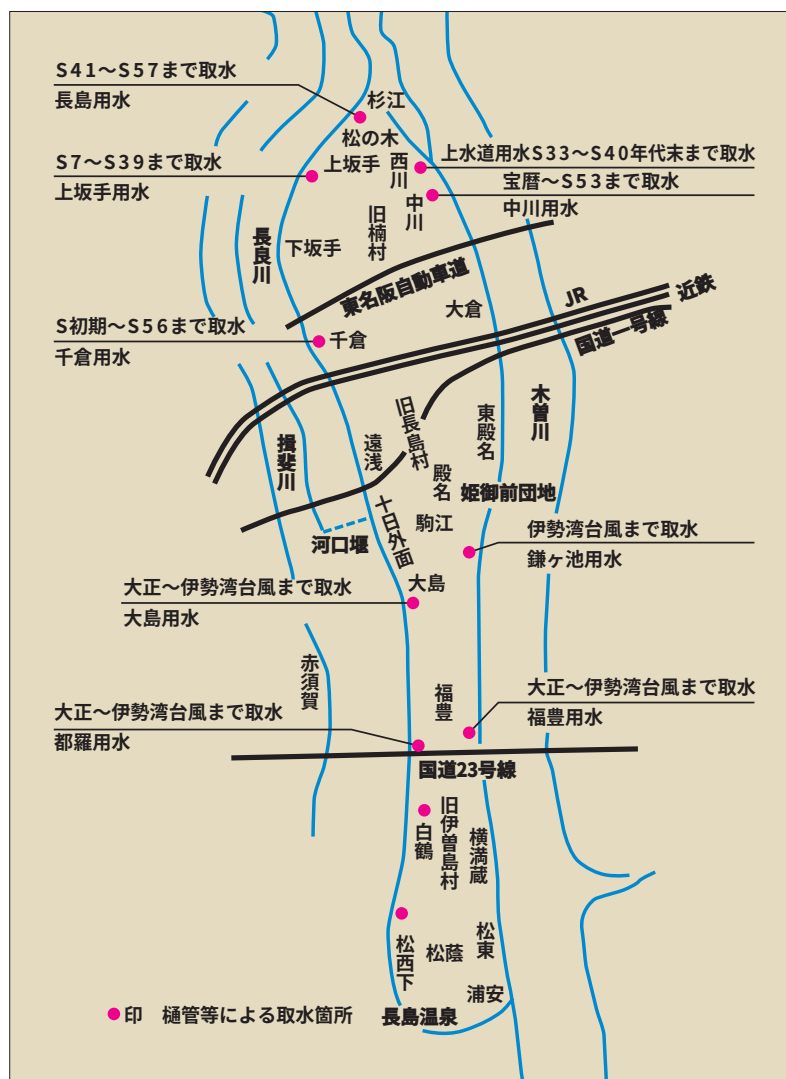
輪中の農業は、明治時代の木曾三川分流工事の前と後では、大きく違うといわれています。分流工事前は大字程の大きさの村が一々数か村集まった輪中を形成していたため、輪中内での農作業は、庄屋を中心に血縁や地縁で結びついた共同体が形成され、分流工事後は、現在の市町村またはいくつかの市町村を纏めて、巨大な複合輪中化したところが多くなっています。木曾三川下流部では、明治時代の分流工事完成后、それまで三年一作といわれていたほど多発した洪水が、全くななくなりました。しかし、長い間破堤しないということは、それまで定期的な破堤による土砂の流入と排水がなくなってしまう、堤内に新しい土砂の流入がなくなりました。これにより、排水が困難となり、悪水と呼ばれる堤内にたまった

水は排水されないまま残り、農作物に悪影響を与えました。また川の中州が増加したり、河口部に新たな干拓輪中が出現すると、河川の水位は上昇して、流れは悪くなり、輪中内の排水がますます困難となって悪水は堤内に溜まったままとなってしまう

した。さて、このような中で、このような輪中の農作物といえば、輪中地域は豊富な水と栄養豊かな土に恵まれた地域であるため、米作が主で、昭和三〇年代からは早場米の産地としての地位を確保しますが、それまでは晩生の生産が盛んでした。この米の裏作に作られていたのが、菜種

で、多くの農家が栽培していました。この他には豆などを作って出荷もしていましたが、他の畑作は自家消費にと

どまっていた。また大半の農家は養蚕も行っており、気候にも恵まれているために春蚕、夏蚕、晩秋蚕の三回



長島の樞門の推移(図1)

も出荷していました。この蚕のえさとなる桑は、堤外地(堤防の外側の河川敷で栽培されていました。またこの堤外地の中州などでは、淡水と海水が交じり合うという好条件のため良質の葎が育ち、農家の副収入として収穫され、ヨシズとして製品に加工されていました。

用排水の実情



大正2年 小島地区の樋門の建設風景①



大正2年 小島地区の樋門の建設風景②

の長島輪中の排水は、ほとんどが海水の満干潮を利用したといわれていますが、年々沈下する地面と年々高くなる河床との関係で、現在のようにほとんどの排水路から水を排水できるわけではなく、悪水に悩まされることになりました。

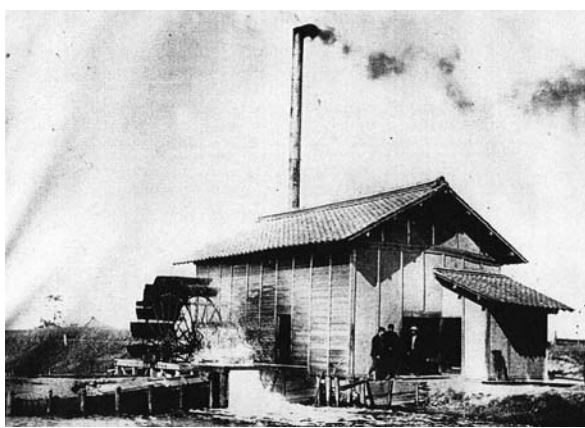
大正2年 小島地区の樋門の建設風景③



長島では、現在でも排水機場は長良川あるいは揖斐川沿い、もしくは南端の伊勢湾近くにあります。これは木曾三川下流地域が西に低く、また、南に低くなっているためで、大半の輪中の排水路は西南に向かっていきます。排水機ができるまで

す。しかし、長島での排水ポンプの設置は全国的にも早い時期に行われ、明治三三年(一九〇〇)に木曾川改修工事の後、長島村十日外面の長良川堤に人造樋の設置工事が始められ、明治三六

年(一九〇三)に水車排水機が運転を始めた。明治三十七年(一九〇四)には長島村大島に、最初の蒸気ポンプが設置されるとその後同所のポンプの性能アップを図りながらも長島各所に排水ポンプが設置されました。



明治時代の蒸気ポンプ排水機(長島町千倉地内)

また明治の改修工事後には、新たに用水取り入れの樋管が建設され、各集落への取水については、昭和四〇年代までは、樋管、樋門およびそれに準ずる施設から取水しました。これらの施設は、長島北部地域においては各集落ごとにありました。12頁・図1参照

ではどのような時に堤内に取水したのでしょうか、古老の話によると

六月の田植え、七月二日頃の虫殺し水、八月四日頃の中干し後の灌水の主には三回とのことですが、この中では七月の虫殺しのための取水はこの地

方独特のものであり、濃尾平野や伊勢平野の大部分で行われていた火を使った虫送りの行事とは好対照で、自然の地形と豊富な水によって考え出された非常に珍しいものです。即ち輪中の樋門を開けることによって一気に灌水させ、そのままに昼夜はどつておくと、二化螟虫等の害虫が死滅します。これは高低差のあまりない輪中の地形を利用したもので、輪中内をいっせいに水没させ害虫を駆除するものです。

悪水被害と用水の課題

長島の水利は、江戸時代からの慣行で各集落ごとに輪中堤外の河川から、掛樋、伏越などの小樋管によって外水を取水して利水していましたが、年とともに年々河床が上がり天井川化していくと、当然自然排水が困難になり、次第に排水が不良となっていきました。記録には慶応年間、明治元年、明治一八年と残っていますが、それ以外にも頻繁に悪水の長期湛水や深水を生じ、水田の作付け不能や凶作をもたらすようになりまし。そのため水田の一部を切り上げて、その土で水田を嵩上げした「堀田」、この地方では「重ね田」と呼ばれる低湿地独特の田で耕作を行うようになります。このため土地台帳には『田一反八畝一五歩、内切上堀三畝二八歩』と記されるようになり耕地面積が狭められました。また秋から春の裏作の栽培としてその「重ね田」と呼ばれる田に、「畝田」と呼ばれる畝が立てられ、前述したように菜種などが植えられました。畝は田面を稲の作付けの列

「輪中の郷」紹介



「堤が切れたぞ」「水が出たぞ」川面をたたきつける大雨、襲いかかる大水。木曾・長良・揖斐の三川が集まる輪中地帯は、洪水の常習地帯でした。水の恩恵を受けながらも、その歴史は洪水との闘いでありました。

その悪条件の下、昔の人々は堤防を築き田畑を開墾して、自然と調和した長島町を築いてきました。輪中の成り立ちと木曾三川の関わりは深く常に水との関係を持って生活してきました。このため現在ではほとんど流れていないように見える木曾三川もわれわれの現代生活と深く関わっています。非常に多量の水を必要とする米作はもちろん、他のどんな作物も水なしで生育しません。昔は樋管の穴をくぐって入ってきた水が、輪中を潤していましたが、現代ではパイプラインにより同じ木曾川の水で潤っています。また輪中内各所に、はりめぐらされた水路は、輪中の舟運が盛んで、どの家にも舟があり、その舟で物を運んだり、人を運んだりしました。このため水路は生活の一部であり、農業にとっても欠かせないものでした。これらが現代でも道路やパイプラインとして活かされ続けています。

輪中をテーマに、知・遊・憩 グローバル・コミュニケーションスペース、輪中の郷。

（作付けの間隔は概ね一尺二寸）を五本（五本畝）通常二段積み（六本（六本畝）通常三段積み）に二畝立てて作られ、高さは五〇cm以上になりました。



畝田を作っている風景

このように「重ね田や」畝田」という独特の耕作方法で通常の耕作面の高さより少しでも高くすることで悪水から作物を守ろうとしました。但しこれらの耕作はたいへんな重労働で、一人前での一日の労働は四畝ぐらいしかできず、一日に食事五回一升飯を食らうとまで云われました。また畝田の線引きには女性が労働参加し、嫁は貴重な労働力といわれました。

このように樋管や樋門から取水した水にもかかわらず、悪水としてその対策を講じなければならなかった長島ですが、南部地域は、この他に樋管から入ってくる水に海水が混ざってしまうようになっけてきます。明治以降上流にダムが建設されると河川の流量が制限され、海水の遡上が激しくなってきたためです。このため昭和の初期からは浅井戸を掘って地下水灌漑を行いました。

農作業と水のかかわり

た。しかし昭和一九年から二一年に掛けての東南海地震等で湧水が止まってしまいました。そこで昭和二年には全ての井戸を深井戸に改良し、これを利用することになりました。

現在では地下水の汲み上げが地盤沈下につながるため、また木曾三川下流域全域で昭和三〇年代から四〇年代にかけての大規模な地盤沈下が発生したために、全町に農業用水の灌漑用のパイプラインがはりめぐされ、木曾川大堰から取水し、弥富揚水機場を経てくまなく灌水しています。

の成り立ちと木曾三川の関わりは深く常に水との関係を持って生活してきました。このため現在ではほとんど流れていないように見える木曾三川もわれわれの現代生活と深く関わっています。非常に多量の水を必要とする米作はもちろん、他のどんな作物も水なしで生育しません。昔は樋管の穴をくぐって入ってきた水が、輪中を潤していましたが、現代ではパイプラインにより同じ木曾川の水で潤っています。また輪中内各所に、はりめぐらされた水路は、輪中の舟運が盛んで、どの家にも舟があり、その舟で物を運んだり、人を運んだりしました。このため水路は生活の一部であり、農業にとっても欠かせないものでした。これらが現代でも道路やパイプラインとして活かされ続けています。

長島町輪中の郷

〒511-1102 三重県桑名郡長島町大字西川1093番地
電話(0594)42-0001 FAX(0594)42-0133

民話の小箱

よそ 与三の火 尾西市

今から四百年前のこと。

起村と小信村の境を流れる小信川をせき止めて大きな一本の川にまとめようという工事が始まりました。しかし、毎日が失敗の連続。

「これはただごとではない。」

きつと水神様のお怒りにふれたのだ。

「こつたては人柱をたてるしかない。」

そんな話はささやかれるようになって

小信村の与三という男が、

自分から人柱になろうと申し出ました。

堤防の上に座りお経読み終えた与三が

さんぶと渦巻く川に姿を消すと、

人々は石や俵をいっせいに川に投げ込みました。

そして、とつとつ流れをせき止めました。

それからいく年かたち梅雨の晩のこと。

地面をたたく激しい雨音を破って、

堤防の方からお経を唱える声が聞こえてきます。

驚いた村人が堤防をかけあがっていくと、

月もない暗い堤防の一点に

不思議な青い火はふわりふわりと浮かんでいました。

その青い光の下では、

白い水しぶきが湧き上がっています。

「おや、あそここの堤防が切れるぞ。」

急を告げる声は村中に伝わり、

みんな総出で土のうを積み上げ、堤防を守りました。

そして明朝、ようやくわれにかえった村人は、

「あのお経の声は与三さんにちがいない。」

「あの青い火は、与三さんの魂だんだ。」

人々は、梅雨の晩の不思議な青い火を

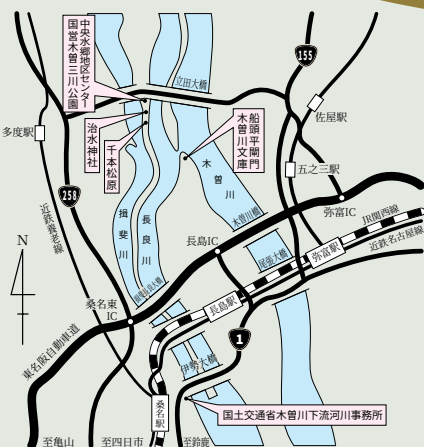
「与三の火」といって、



子どもたちに伝えるようになりました。その後、この堤防は切れることもなく、村人たちは安心して暮らせるようになりました。

この川の近くには「人柱と光観世音菩薩」が建立され、毎年、しめやかに例祭を行い、与三の霊をなぐさめています。

木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平岡門管理所・
木曽川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



●表紙写真● 上：自然が美しい木曽川河畔 下左：富田山公園のフィールドアスレチック 下右：尾張随一の打ち上げ花火

編集後記

弊紙では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、愛知県尾西市の皆様、及び諸戸靖氏にご協力いただきありがとうございました。お礼申し上げます。

今回は、長野県木曽福島町を特集します。ご期待ください。

宛先 「KIASO」編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

『KISSO』Vol.48 平成15年10月発行

発行：国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL (0594) 24-5715

木曽川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル） TEL (052) 565-1976